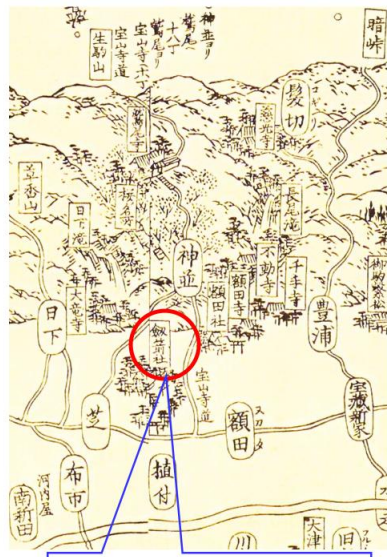


石 切



江戸時代「劔箭社」と表記

石切に石切場なし。英雄、名を遺す

今も参詣者が絶えない2000年の歴史を誇る石切、劔箭神社からつけられた地名。

劔と箭「石おも切る劔と矢」ということで「デンボ（はれもの、癌）」を治す霊験あらたかな神社として全国的に有名。もともと物部氏の一族、穂積氏の穂積神霊社だったところから饒速日尊の神格、劔、箭の持つ霊力を祀ったものと考えられる。「物部」から、兵士を「もののふ」というのは、このことに由来している。では、「石切」は、①石を切り出すところ

②行基建立の石凝院（日下）があった。

実は、「石切」の名そのものは、蝦夷語で「イ・シ・キルイ」（彼の大きいなる脚）長い脛を持つ男＝長髓彦に由来しているという。神武伝承に登場する「蝦夷」は、アイヌ語の祖語を喋る人たちであったと考えられる（イシキリ、トミ、クサカ、シラカタ、イコマ、ヨシタ など）『長髓彦の実像』進藤治

地名、石切は案外新しく、昭和25年、枚岡市政になってから。江戸時代は芝、神並、芝神並、植付と別れ、明治22年合併して大戸村（おおむら）となる。なお、大宝律令（701）以後、大戸郷と呼ばれていた。

新 喜 多

鴻池新十郎、鴻池喜七、今木屋多兵衛の三名が開発を請け負った新田名。

3名の名前を1文字をとり「新喜多」とした。付け替え前の大和川はこの辺りで270mあり、渡船が行き来していた。

今も、渡し地蔵尊が祀られている。



鴻 池

鴻池の地名は伊丹市鴻池に由来している。

宝永元年（1704）の大和川の付け替え工事により造られた新田は192町歩に及び、翌年には121戸750名が移住している。この工事を請け負ったのが大阪の豪商、鴻池善右衛門宗利で地名は、開発者の鴻池新田と名付けられた。

鴻池家は、尼子氏の忠臣、山中鹿之助幸盛の子ども、新六幸元が摂州河辺郡鴻池村（今の伊丹市鴻池）に移住し、武士を捨て酒造りを生業としたことに始まり、屋号を村の名前「鴻池」にした。鴻池の清酒は評判良く、江戸で沢山売れた。「下りもの」という言葉があるが、鴻池の酒は馬の背に酒樽を載せて運んでいたが、あまりに大量に売れたので、船で運ぶようになったという。斯くして鴻池家の海運業が始まり、莫大な資産を蓄えた初代、鴻池善右衛門正成は天王寺屋五兵衛に学んで両替商などを営み豪商となった。

なお、JR鴻池新田駅は明治45年、大久保利通が鴻池会所を訪れたとき、臨時に設けられた駅で、その後開業し鴻池家が駅舎を整備した。

『日本書紀』に記された饒速日尊と長髓彦

神武天皇と物部氏、石切劔箭神社

1. 時に長髓彦、乃ち行人を遣して、天皇に言して曰さく、「嘗（むかし）、天神（あまつかみ）の子（みこ）有（ま）しまして、天磐船に乗りて、天より降り止でませり。号（なづ）けて**櫛玉饒速日命**と曰す。饒速日。此をば**瀬芸波椰卑**と云う。是吾が妹**三炊屋媛**（みかしきやひめ）亦の名は長髓媛、またの名鳥見屋媛と曰す。故（かれ）、吾（やつかれ）、**饒速日命**を以て、君として奉（つか）へまつる。夫れ天神の子、豈両種（ふたはしら）有（ま）さむや。奈何（いかに）そ更に天神の子と称（な）りて、人の地（くに）を奪はむ。吾心に推るに、未必為信（いつはり）ならむ」とまうす。…（略）
2. 長髓彦、即ち饒速日命の**天羽羽矢一隻**（あめのははやひとは）及び**歩鞞**（かちゆき）を取りて、天皇に示（み）せ奉（たてまつ）る。天皇、覧（みそな）して「事不虛（まこと）なり」とのたまひて、還りて所御（みはかし）の天羽羽矢一隻及び歩鞞を以て、長髓彦に賜示（みせたま）ふ。長髓彦、その天表を見て、益々おそれかしこまること懷（うだ）く。

然（しか）れど凶器（つわもの）已（すで）に構へて、其の勢（いきほひ）、中（なかぞら）に休（や）むこと得ず。

3. **饒速日命**、神と人とは全く違うものであることを教えたが分かりそうもないので、「乃ち殺しつ。その衆（もろびと）をひきいて帰順（まつろ）ふ。此れ**物部氏の遠祖**なり。

※『先代旧事本紀』では「饒速日尊の兄宇摩志麻治命を推して君」として。

※石切劔箭神社祭神 饒速日尊、宇摩志麻治命

※ 羽羽（はは）とは、大蛇の古語

旧川床の新田開発<鴻池新田>

- （1）大和川の旧河川は新田に生まれ変わる

新田開発の予定面積は1.028町歩になり、潰地270町歩の3.8倍となった。

（1町歩＝1ha＝1万㎡。甲子園グラウンド約1.3万㎡）

- （2）開発された主な新田

町人請負（68%）、寺社請負（9.7%）、農民寄合請負（22.3%）

- （3）鴻池新田—新田の中でも最大の広さ

宝永元年（1704）大坂京橋の土木請負人大和屋六兵衛と中垣内村長兵衛から

新開地の開発権利を譲り受ける。12.733両1歩2朱幕府に上納

宝永2年（1705）2月から開発を始め、2年後の宝永4年（1707）6月に完成。

開発は新開地の堤を崩して池床に入れ、約179町の土地を造成して井路を掘削し、道、橋、樋門などを設けた。このうち年貢の課税対象となる田畑屋敷地を合わせた面積（反別）は、約120町、石高は870石になった。121戸移住、入作360戸

宝永7年（1710）には中新田前嶋を買い取る

享保4年（1719）の検地では反別約158町、1,706石となる

享保10年（1725）三嶋新田と橋本新田の一部、享保16年（1731）に中新田西

寺嶋、安永6年（1777）に中新田東寺嶋を買収し、面積を拡大していった。

☆新田造成、架橋、会所、神社、小作人の住宅建築など土木工事費総額、30,550両、約6億1千100万円

菱屋西・中・東と菱江



菱屋の地名は大和川付け替え工事後の新田開発者の菱屋庄左衛門の屋号をとったもの。17世紀の初め織田信長、豊臣秀吉に敗れた紀州の根来衆の一人、規矩九右衛門が新家に移り住み、四代目庄左衛門は呉服商として幕府をはじめ、大和郡山の柳沢家に入りし許されて柳沢家の定紋「菱」を屋号とした。

宝永元年（1704）の大和川が付け替えられると、長瀬、楠根、玉串三川の川床に合計68町歩の新田を開発した。それぞれに屋号「菱屋」をつけ、菱屋西新田、菱屋中新田（藤戸新田）菱屋東新田とした。

しかし、享保17年（1732）菱屋三新田は全て三井家（越後屋）の所有となり、明治になって菱屋中新田の大部分は藤戸家の所有となり、大正6年藤戸新田と改められた。

「江」という字は、陸地に海や湖水の入り込んだ地形を表す。

深野池の広さは、南北80町、東西40町、ところによって東西20町ばかりである。湖に似ていて、その中に島があって、「三箇」という村もある。漁家が70～80戸もあって、田畑もある。この島は、南北が凡そ20町、東西が凡そ6町である。

この池には、鯉、鮒、鯰、蝦（えび）、鰻などがたくさんいて、それをとる舟も多い。とった魚は大阪へ売る。また、蓮、水路、葦（あし）なども多く、それをもって生活の助けとしている。なかでも、菱が最も多く、ご飯や団子、お粥等にして食べている。また、この島から魚をとる舟に乗って陸に渡り、田を耕している者もある。深野池の周りには、およそ42の村があるという。この池の水は流れて、終わりには大和川に出る。川下から商品を積んだ舟が、毎日行ったり来たりしている。

（『南遊紀行』貝原益軒 元禄2年1689）

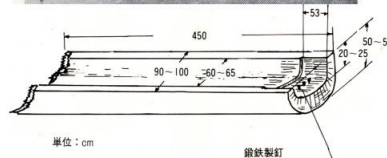
近江堂

当時は川幅が200m以上もある旧大和川の洪水による水害が度々あり、その水戸（水門）の守り神として彌刀神社があった。本来は近江堂の村向き（東）であるべき社殿が川向き（西）に構えられているのはそのようなことから考えられる。

平安時代の延長5年（927）に完成した延喜式神名帳には、河内国若江郡二十二座の中に記載されている式内社で、官幣小社だった。社殿には、河口の神すなわち水戸の神、速秋津日子神と速秋津比売神を主祭神としてお祀りしている。摂社八坂神社には災害や厄除けの神、須佐之男命（牛頭天王）を、末社常世神社には、国造り、産業や医療の神、大己貴命（おこなむちのみこと・大国主命）をお祀りしている。

昔の神社用地は現在よりも広く、戦後まで西の鳥居から旧大和川右岸堤防跡までには、お旅地・馬場地・御供田といった神社関係の小宇名の地名が連続して残っている。

このことは御祭神、水戸（水門）の神とも符合し、水戸が彌刀に転訛し、太水戸が近江堂に転訛したという現在の地名も伺える。『御鎮座由緒略記』より



- 上 弥刀小学校出土の大型木片
須恵器など4点、長さ1.8m～3m、幅25～30cmの木片6つ
- 下 金岡3丁目の水路の地下約2mのところから、10mくらいの丸太を深さ20～25cm割り抜いて加工したもの。
- いずれも、旧大和川堤防下に埋められた用水のための木樋

岸田堂

岸田堂を地元の人は「キシナドウ」と呼んでいたようだが、大今里の暗越奈良街道脇にある文化8年（1800）の道標に「右きしのだうくはんぜをん」とある。

この辺りも古代においては土地が低く長瀬川や平野川が氾濫し野原が広がっていたと思われる。「岸」または、「岸田」は地形から付けられた名で、「堂」は慈眼山長楽寺と言われている。長楽寺は東西60m、南北36mと敷地が広く、本堂、鐘楼、庫裏などの建物があった立派なお寺であって、建治3年（1277）銘の梵鐘もあった。

伝えによれば寺は推古天皇の創建、本尊の十一面観音菩薩は聖徳太子、または快慶の作といい、疱瘡（天然痘）を治す仏様として有名で信仰を集めていた。

江戸時代は黄檗宗万福寺（隠元禅師）の末寺（初代住職松井宗峰師）となり、明治になって神戸に移築された。

明治になると種痘が広がり、疱瘡除けの信仰も薄れ明治21年（1888）廃寺となる。

その長楽寺の跡は、岸田堂の公民館あたりで、寺跡の記念碑が残っている。

碑の表書きには、
「かの岸に たどろんで
わたす 御仏の ちかいや
長き 楽を江ん」



神戸、関帝廟の「長楽寺の手水鉢」
（貞享3年、1686）



瓜生堂

- ①湿地説、「潤う野」等
- ②瓜の野生地、或いは栽培地説
- 「ウリ ウ」とは、川岸の高所

* J. バッチェラー『アイヌ・和・英辞典』
1938年第四版岩波書店）

- 「高い岸」瓜生堂に対する「低い岸」新家の存在
- ☆「高い岸」説を何より補強する方形周溝墓穴墓域
- ☆1965年～1966年、中央環状線敷地の南北300mに散乱していた夥しい土器片、遺物、盛土（方形周溝墓）、第二寝屋川掘削工事中、断面に露出していた組合せ式木棺（コウヤマキ、ヒノキ）等

- ☆近鉄奈良線・第二寝屋川・中央環状線がつくるトライアングル内（聖なる三角地帯）からの出土。約1haに密集（墓群4～5箇所）広がる遺跡指定地
- ☆第2号方形周溝墓 東西10m・南北15m・高さ1.2mの墳丘と周濠の全く損傷のないほぼ完全な形で発掘され、複数の木棺、土器棺、人骨なども発見された。弥生中期（約2000年前）の代表的な遺跡で教科書などにも掲載されている。現在の小阪ポンプ場の建設時に発見されたが、当初の設計を変更することにより地中に埋め戻され同敷地内に保存されている。

- ・厚葬思想と盛大な祭祀墳丘中央部の6基の組合せ木棺と周辺部の6基の土器棺。3世帯の夫婦とその子どもの家族墓。男性優位。配偶者は他集落から
- ☆満潮・大潮・風水害による氾濫から最も安全で安定した地域に営まれた墓域。平均3世帯を葬り、祀った半恒久墓（百年の墓）

岸田にはお堂あり、近江堂、瓜生堂にはお堂なし

弥生期の瓜生堂・小区画水田稲作と青銅器製作



弥生時代前期水田面

- ・イネ属機動細胞硅酸体
プラント・オパール
半永久的に残る
- ・縄文系先住民の参加協力による
吉備系小区画水田稲作
農耕の発展

【凡例】

弥生時代前期

弥生時代中期

弥生時代後期

集落域

集落域

集落域

水田域

水田域

水田域

瓜生堂遺跡周辺における弥生遺跡の展開



099 銅戈鋳型 瓜生堂遺跡 弥生時代中期

弥生中期
銅戈 銅鐸形土製品
弥生中期中～後
大阪湾型銅戈c類
銅戈石製鋳型
銅剣形石剣 石戈

放出

通説は、沼沢地から水を「放ち出す」。出（で）は地点異説だが、

式内社、阿遅速雄（あぢはよお）神社

第二寝屋川に長瀬川が合流する地点の北側に鎮座。主祭神は、味耜高彥根神（あじすきたかひこね）。現在は草薙剣の分霊正一位八剣大明神を配祀する。往古は八剣（やつるぎ）大明神と称したという。少し、説明を加える。祭神の味耜高彥根命は、鴨（加茂、賀茂）氏が崇拝していた神で、土地を拓き人々に農耕の技を授けたといわれている。それでは、農業神である味耜高彥根命が、「八剣大明神」と呼ばれるようになったのか。実は、次のような話がある。

天智天皇7年（668）に熱田神宮の草薙剣を盗みだした新羅の沙門道行は、当地付近で暴風雨に遭遇したことから、神罰をおそれて草薙剣を投げすてた（放った）。この草薙剣は一時阿遅速雄神社が預かり、その後、宮中に保管されたが、やがて、朱鳥元年（686）天武天皇の病が草薙剣の祟りと見なされ、草薙剣は熱田社（現熱田神宮）に移されている。

八劍神社

旧大和川の支流、玉櫛川から分かれた菱江川床を付替え後、菱屋東新田として開発された場所。

「付近は島と呼ばれ、応永3年（1396）に宇賀御魂神（稲荷の祖神、うかのみたまのかみ）を勧請後、放出に鎮座する阿遅速雄神社の味耜高彥根命を加え、八劍神社となった」と由緒書にある。

天智天皇7年（668）に発生した熱田の宮、草薙剣盗難事件の際、盗んだ新羅僧が河内湖に入り、大嵐に遭い恐れをなして神剣を河口近くに放った（放出）。その劍をこの地の里人が拾い、阿遅速雄神社に合祀奉斎後、神剣は熱田の宮に戻された。

14

永和（なごにご⇒えいわ）

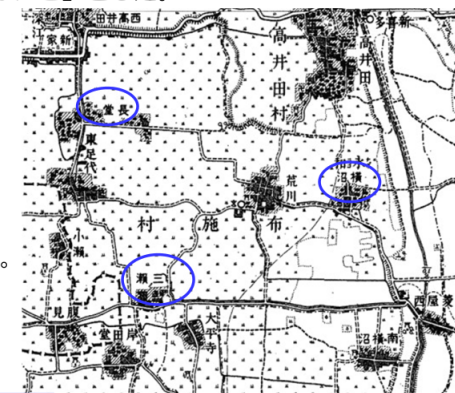
「永和」は、明治につけられた地名だが、当初は「なごにご」と読んだ。この「なごにご」には深い謂れがあり「永和」に人たちの願いが込められていた。

江戸時代には横沼、長堂、三ノ瀬が荒川村に属していた（枝郷・村内の集落）が、明治6年（1873）になり一つ村として認知され独立したいという希望が江戸時代（天保9年、幕府の巡察使に嘆願書）より有り、ときの堺県令税所篤（さいしょうあつし）はこの要望を入れて荒川村から分離して一村とし、永久に平和であるようにと、「永和」と名付けた上、読み方を「なごにご」とした。

しかし、明治20年の頃、長堂は東足代村に、三ノ瀬は荒川村に合併し、「なごにご」は旧横沼だけになった。「なごにご」は永和（えいわ）に変わった。

明治21年（1888）、国は市制・町村制を公布。翌年、東足代、太平寺、荒川、岸田堂、菱屋西新田そして永和の各村が合併して布施村となり、新たな戸長が置かれた。村名も、大阪府布施村大字永和となる。

大正3年、三つの村の産土神を祀る神社は、足代（現、布施戎神社）から荒川村、鹿島神社に遷座してきた延喜式内社・都留弥神社に合祀された。



枝郷の 夢破れ 永き和（なごみ）が 今残る

明治22年頃の地図 陸地測量部

玉串（櫛）

往古の玉櫛之荘（七村）の中心は、玉串明神と呼ばれた津原神社（祭神・天玉櫛彦之命など）で、神社から南へ600m程一直線に続く見事な道（河内三大馬場の一つ）があり、南の端に重厚な石鳥居が建っている。

鳥居は元禄12年（1699）の建立で「玉串惣社」の額が掲げられ、脚には「玉櫛庄市場村」と刻まれている。この付近には物資交易の市があったことが分かる。

「玉櫛」の地名についての由来が『橋島荘両社縁起』に残されている。

「天平勝宝6年（754）9月、河内郡（こおり）一帯に風水害が甚だしく、村人が極度に緊迫して之を救うに術なく、人々は只管（ひたすら）に天候の回復を祈るばかりであった。その時、加美村の八幡宮の祀部（いわいべ）に神託があり、櫛（くしげ・化粧道具を入れる箱）と橋を川に流し、止った所に神を祀れとあった。

そこで大和・河内の国境で試みると、柏原付近で櫛は北へ、橋は西へと分れ、櫛は津原の池の澁みに流れ着いた。

今の津原神社（玉串明神。津原の池はご神体）で川の名前も玉串川となった。一方、橋は東住吉区の加美に止り、今の旭神社がそれで、この付近一帯を橋島荘と呼ぶことになった。」と。



13

衣摺



守屋最期の地（衣摺神社跡）
に平成元年、地元の有志によつて建てられた**衣摺顕彰碑**
碑の台共の高さ、1.85m。
幅1.7m。石材は御影石

歴史的に古い地名「衣摺」の由来と、「丁未の変」の顛末が書かれている

- 今から、1440年程前、八尾市から東大阪市にかけて物部氏と蘇我氏との戦いがあった。厩戸皇子（聖徳太子）は蘇我氏側について戦っている。

物部守屋は本拠地、渋川郡に蘇我馬子の軍を迎え撃った。守屋は「榎の枝間（また）に昇りて、臨（のぞ）み射ること雨の如し、其の軍（いくさ）、強く盛（も）しても家に埒（み）ち野に溢（あ）れたり。」しかし守屋はこの地、衣摺で討たれた。

聖徳太子がこのことを哀れんで大櫛に衣の袖を擦りつけて嘆き悲しまれたことから「衣摺」となった。

- 他の説は、古代この辺りの人たちは「青摺」「丹摺」の摺衣（すりぎぬ）を作っていたと考えられ、地名はこの「摺衣」からつけられた。引田部の赤猪子が涙を流しこの「丹摺」の袖を濡らして歌った

「日下江の 入江の蓮 花蓮
身の盛り人 羨（とも）しきろかも」

この赤猪子の着ていた丹摺は、衣摺の人達が作ったものと考えられ地名と符合する

◎衣摺は、地名とともに非常に古い歴史を持つ地

15

◀「丁未の変」・ていひのへん▶蘇我馬子ら物部守屋を滅ぼす

- ◆敏達14年(585)8月敏達天皇死去、橘豊日皇子、用明天皇が即位する
- ◆用明天皇元年(586)欽明と小姉君(おあねのきみ)との子、穴穗部皇子は、自らが天皇後継者と思い
「穴穗部皇子、欲弑炊屋姫皇后而自強入於殯宮(『紀』)。
止められた穴穗部皇子、守屋に命じて敏達の寵臣三輪君逆(さかう)を殺そうとする。三輪君逆は三輪山に隠れるが殺される
- ◆用明2年(587)4月、用明天皇は病になり、三宝(仏法)を信奉したいと欲し、群臣に議するよう詔した。初めて仏教に帰依した天皇。
守屋は朝廷を去り、館のある河内(阿都・跡部)へ退く。
- ・4月9日、用明天皇は崩御。
馬子は甥の泊瀬部皇子、後の崇峻天皇、
守屋は穴穗部皇子を皇位につけようと図る。
- ・6月7日、馬子は先帝敏達の皇后、豊御食炊屋姫(とよみけかしきやひめ)の詔を得て、穴穗部皇子の宮を包囲して殺す。翌日、宅部(やかべ)皇子を殺した。
- ・7月馬子、諸豪族の軍兵を率いて守屋を攻める
8月泊瀬部皇子が即位(崇峻天皇)
⇒5年後、崇峻5年(592)
東漢直駒に暗殺される。蘇我馬子の指示?
泊瀬部皇子は、穴穗部系

